

## A 病棟における看護学生教育の現状報告

A status report on ward nursing student education

東病棟 7 階

佐々木しなの 中村加代子 中西美佐穂

### <要旨>

A 病棟では、昨年度まで臨地実習指導者が、学生実習に合わせた勤務をしていなかったため、継続して関わることができず、週末カンファレンスに参加できる程度であった。そこで、今年度は継続して学生教育に関われるように、実習期間中は指導者が継続して日勤勤務となるなど看護体制を整えた。看護師アンケート及び学生の感想文からそれらの取り組みは、学生、看護師双方にとって効果的であることがわかった。

### <Keyword>

学生教育, 臨地実習指導者, 継続した指導

### I. はじめに

A 病棟では、昨年度から臨地実習指導者（以下指導者）2 名が中心となり、保健学科の看護学生教育（以下学生教育）に関わっている。しかし、昨年度は指導者が実習期間に合わせた勤務をしていなかったため、週末カンファレンスに参加できる程度であった。そこで、今年度は実習期間中、指導者は日勤勤務となり、継続して学生教育に関われるようにした。また、その役割を発揮できるように体制も整えた。これらの取り組みについて、学生・看護師双方の立場から評価したいと考え、この研究に取り組んだ。

### II. 研究方法

- 1、研究期間：平成 22 年 4 月 1 日～12 月 31 日
- 2、対象：
  - ①A 病棟看護師 29 名
  - ②当病棟において平成 22 年 5 月 10 日～12 月 24 日までの期間に実習を行った看護学生 3・4 年生
- 3、研究方法：
  - ①A 病棟看護師へのアンケート調査（平成 22 年 12 月 16 日～26 日）
  - ②学生の感想文（実習終了後に任意に記載され、学校に提出されたもの）から学生教育の評価が見える文章を抜粋した。

### Ⅲ. 倫理的配慮

研究対象者には、以下について文書で説明を行い、同意を得て行った。アンケート及び学生の感想文は個人が特定されないようにプライバシーの保護に十分配慮すること、研究への参加は自由意志で、参加しなくても不利益がないこと、アンケート内容は研究目的以外には使用せず、データの保管・処理は責任を持って行い、研究終了後はシュレッダーにかけて確実に処分することについて説明した。なお、本研究は、当院看護研究倫理委員会の審査を受け、承認を得ている。

### Ⅳ. 指導者の役割（指導者2名は各チームに1名ずつ配置）

- 1、実習目的・目標を把握し、病棟看護師に理解してもらう。
- 2、実習前に、チームメンバーや病棟師長に相談する機会をもち、学生が担当する患者を決定する。
- 3、実習期間中は1週間ずつ交代で日勤勤務をする。指導者は、日々の日勤勤務の中で受け持ち患者は持たないが、入院の受け入れやフリー業務を兼務する。
- 4、学生が担当する患者の看護全体について、助言や指導を行う。担当看護師が新人の場合は、指導者が学生指導を全面的に行う。
- 5、学生の担当患者の検査、搬送、清潔援助などは、部屋担当看護師と相談しながら学生と一緒にやる。
- 6、週末の学生カンファレンスに参加し、学生へのアドバイスをやる。
- 7、実習期間中に臨床講義を計画してやる。
- 8、担当教官との情報共有・連絡・調整を行う。
- 9、保健学科との話し合いに、師長と共に参加する。

### Ⅴ. 結果

#### 1、A病棟看護師へのアンケート調査結果

アンケート配布数 29 枚 回収数 22 枚 回収率 75.8%

- 1) 『今年度、臨地実習指導者が1週間ずつ、継続して学生教育に関われるように体制を整えました。このことについてどのように感じていますか』

学生教育について: 良い19名(86%) どちらでもない2名(9%) 良くない1名(5%)

看護業務について: 良い12名(55%) どちらでもない7名(31%) 良くない3名(14%)

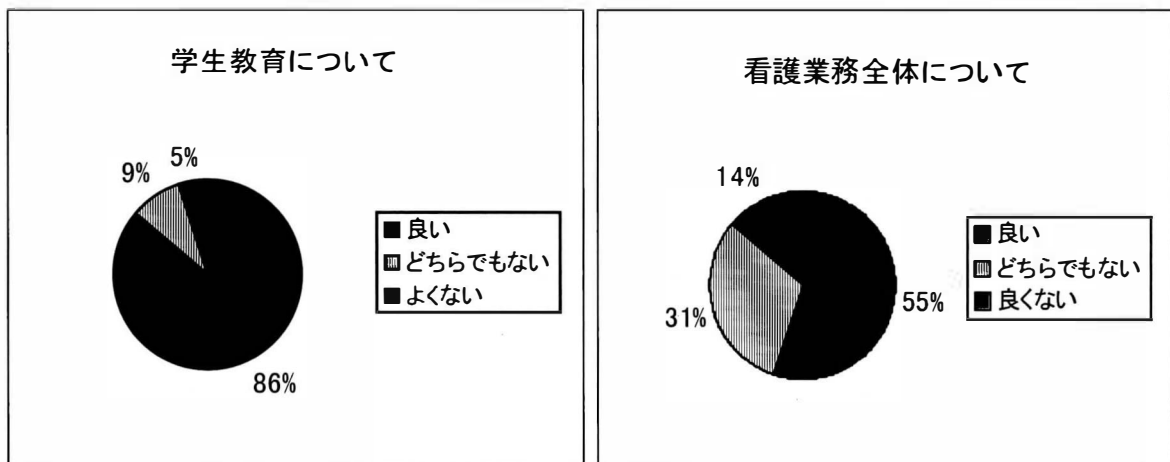


図1 『今年度、臨地実習指導者が1週間ずつ、継続して学生教育に関われるように体制を整えました。このことについてどのように感じていますか』

2) 『日勤の部屋持ち時に学生担当の患者を受け持っている場合、指導者に協力してもらえることはどのようなことですか』

- ・ 学生の受け持ち患者の看護に協力してもらえる(保清・搬送・食事介助・血糖測定・内服確認など)
- ・ 食事指導、退院指導などの患者支援に協力を得られる
- ・ 学生からの報告、学生への指導内容を一緒に聞いてもらえる
- ・ 学生の看護計画の見直しやアドバイスをしてもらえる
- ・ 医師や他部門との連絡、連携をしてもらえる

3) 『指導者が継続して学生に関わることで、学生にとって良いと考えることはどのようなことですか』

- ・ 窓口があるので相談しやすい
- ・ 多数患者を受け持っている部屋担当看護師よりも声をかけやすい
- ・ 指導者・学生共に現在の到達度を把握しているため、実習しやすい
- ・ 週末の学生カンファレンスは学生の状況を把握して出席しているため適切なアドバイスができる
- ・ 部屋担当看護師が日替わりであっても指導者が毎日関わることで、継続して指導ができる

4) 『指導者が継続して学生に関わることで、看護業務全体にとって良いと考えることはどのようなことですか』

- ・ 1・2年目の看護師が、学生教育を負担に感じないように配慮できる

- ・ 指導者と部屋担当看護師間で連絡調整できる
- ・ 清潔援助など指導者に依頼できるので、他の患者の看護を中断せずに継続できる
- ・ ケアが重なるなど多重業務で学生に関わる時間をとることが難しい時には、指導者が十分に学生指導してくれる
- ・ 業務分担ができるので業務がスムーズ

2、学生からは 26 人中 18 人から研究の同意を得られた。学生の感想文の内容を分類した

### 1) 安心感

- ・ 安心してケアを実施できた
- ・ 困った時に声をかけてもらえて嬉しかった
- ・ 分からないことがあった時に、誰に聞いたらよいか分かりやすかった
- ・ 声をかけてもらえて、相談してもいいんだという気持ちになった。相談すると丁寧に教えてもらえたり、アドバイスをしてもらえてとてもありがたかった
- ・ 学生担当という立場で病棟の方と接するのは初めてでしたが、行動計画や質問に対して快く対応していただけて、学生が実習を積極的に行える環境、場の雰囲気を作っていただけた
- ・ ケアなど声をかけていただけてとても嬉しかった
- ・ 穏やかな態度で学生に接して下さって、とても安心でき、頼りになりました

### 2) 心強さ

- ・ 学生担当がいるというだけで心強く感じた
- ・ A 病棟のように学生担当がいると、学生にとってとても心強く、自信がついて積極的な行動がとれると思います
- ・ 誰に声をかけていいのか分からなく、探すのに時間がとられていたことがなくなり、学生担当者には急に声をかけても毎回対応してくれて心強かった
- ・ 指導者がいつもいるので、統一した指導が受けられた

### 3) 満足感

- ・ 忙しい時でも時間をとって対応してくれたので、ケアにたくさん介入でき、充実した日々だった
- ・ プランニングなど見て確認していただき、アドバイスを受けることができ、担当患者さんについての理解が深まった
- ・ 疑問に思ったことなど今までは言い出せないことがあったが、指導者がいたことで聞くことができ、問題解決できた

- ・ 部屋担当看護師を探して待つ必要がなく、指導者が対応してくれたので、効率良く実習ができた
- ・ 病棟の看護師に声をかけるのだけでも緊張し、躊躇してしまうが、今回はそのようなことはなく、とても積極的、自主的に実習を行うことができた
- ・ 計画したことを気にかけてくれて、一緒に行ってもらえた

#### 4) 患者、学生、看護師、医師との連携

- ・ ケアなどの時間調整をしてくれた
- ・ 学生担当者がいたことで、患者や他の看護師との関係作りもスムーズに行えた
- ・ 患者さんや医師や看護師間の連絡調整をしてもらえた
- ・ 困ったことがあった時にすぐに相談することができ、とてもスムーズに実習を進めることができた
- ・ 疑問に思っていたことを質問すると、医師に確認して次の日に教えてくれた
- ・ 学生が看護計画を看護師に伝えやすかった

## VI. 考察

A病棟での昨年度の学生教育は、指導者が各チームに1名ずついたが、学生教育を主体とする勤務体制ではなく、日勤で勤務している時のみ部屋担当をしながら学生教育を行っていた。そのため、週末カンファレンスに参加しても学生の到達度や、実習状況が理解できず、十分な指導ができていたとは言えなかった。そこで、今年度の初めに学校側との話し合いに出席した際、学生実習にとって良い体制とは何かと考えた。その結果、各チームの指導者が交代で日勤勤務となり、継続して学生に関われるように体制を整えることとした。学生教育専任にはできないが、部屋担当はせず、入院の受け入れや、搬送や保清をしながらではあるが、昨年度より、より密に学生に関わることができた。なるべく学生教育に専念できるように、学生担当であることを勤務表に明記し、スタッフに周知した。指導者として、こまめに学生とコミュニケーションを取りながら、常に学生の行動に気を配り、週末カンファレンスでは、次の週の課題を提案することもできた。学生の感想文から、「安心感」「心強さ」「満足感」というキーワードが得られた。鈴木<sup>1)</sup>らは『学生がやりたい/やろうとしたことを、指導者が全面的に認め、支持し、学生のペースに合わせて「やらせてくれた」ことによって学生は、喜びや安心感を得ている。このことによって、看護することの楽しさも感じるができる』と述べており、A病棟の学生教育の体制も同様の効果が得られているのではないかと考える。また、鈴木<sup>1)</sup>らは「学生にとって、実習指導者はもちろん実習中に関わる看護師の存在は、

看護師たちが思っている以上に大きなものであり、看護師たちに関心を示してもらえた時にはモチベーションが上がり、存在価値が認められた時には大きな自信となる」と述べており、学生の感想文で、「安心感」「心強さ」「満足感」があることから、常に学生のことを気にかけている指導者の存在は大きいのではないかと考える。また、患者は慣れない学生に不安があるかもしれないが、毎日同じ指導者が看護ケアを一緒に行うことで、患者も安心できるのではないかと考える。このことは、学生教育に協力しやすい環境にもつながっている。

看護師アンケート結果は、9割が今年度の体制が、学生教育にとって「良い」と答え、肯定的に捉えていた。指導者が毎日学生に関わることで継続した指導ができること、適切なアドバイスができるなどの回答から、昨年度に比べ、指導者の役割を發揮することができているのではないかと考える。作田<sup>2)</sup>らの研究では、専任指導者体制について学生の記録から「指導者が専任であるがゆえに学びやすい環境であったこと、学習意欲の向上につながったなどの内容の記述が多くを占めた」とあり、指導者が専任で継続した指導を行う体制が大切であると考え。A病棟では現在、専任体制ではないが、指導者は学生と共に看護ケアを一緒に行うため、学生の到達度に合わせた関わりを日々継続して行っている。「学生が看護計画を看護師に伝えやすい」、また「計画したことを指導者が常に気にかけて共に行ってくれる」などの学生の感想文から、看護実践において満足感が得られる環境が整っているのではないかと考える。

看護業務全体を考えた質問では、55%は「良い」と回答し、14%が「良くない」と回答していた。このことは、実習期間中も通常の勤務者数と変わらないため、看護業務に負担を感じているのではないかと考える。特に、経験が浅い看護師が学生教育を行うことは非常に困難な現状がある。しかし、指導者が中心となり継続して学生教育を行うことで、対象となる看護師の負担は軽減されている。また、学生が受け持つ患者の看護を、指導者が日々把握して介入しているため、部屋担当看護師の負担も軽減できている。早坂<sup>3)</sup>は、「専任指導者を置くことにより、実習中に個々の学生に合わせた細かなフォローができる」といった教育の環境整備の側面はもちろんですが、それだけではなく、周囲の通常業務に就くスタッフが、実習に関するさまざまな調整を気兼ねなく専任指導者に依頼できることで実習に効果的に関わることができ、また、自分たちの業務もスムーズに運ぶというメリットがあります」と述べている。そのことから、専任の指導者の存在は、看護業務にとっても効果的であると考え。

現在A病棟では、指導者は受け持ち患者を持たずに、入院患者の受け入れやフリー業務をしながら学生教育を行っている現状である。鈴木<sup>1)</sup>らは「特定の実習指導者を位置づけることのデメリットとして、臨床実習指導者以外のスタッフが学生指導に関心を示さなくなることが他施設からも報

告されている」と述べている。今後の課題は、病棟看護師がお互いの役割を尊重し、業務調整を行い、それぞれの看護師自身が学生実習の実習目的・目標を理解して学生に関われるように、指導者がさらに働きかけていくことが重要である。実習指導へのスタッフ参加体制の整備も必要であると考えられる。

学生が安心して実習でき、臨地実習の中で充実感や達成感が感じられていれば、それは指導する看護師自身のモチベーションアップにもつながっていくことが考えられる。

## VII. 結語

指導者が継続して学生教育に関わることは、学生と看護師さらには患者にとっても効果的である。

## 引用文献

- 1) 鈴木真理子他：臨床が担うべき看護教育 看護教育 NOV. Vol. 47 No. 10 P892 - 898 2006
- 2) 作田裕美他：急性期・回復期看護学実習における教員と専任指導者による複数連携体制  
看護教育 OCT. Vol. 45 No. 09 P746 2004
- 3) 早坂百合子：各病棟に専任指導者を配置 Nursing Today SEP. Vol. 20 No. 10 P33 2005

## 参考文献

- 1) 岡崎千賀子他：臨地実習指導のあり方を考える 看護教育 第38回 2007
- 2) 森田孝子他：これからの臨地実習 Nursing Today SEP. Vol. 20 No. 10 2005